



TITLE:

天文臺という觀念, 等々 : 卷頭隨筆

AUTHOR(S):

山本

---

CITATION:

山本. 天文臺という觀念, 等々 : 卷頭隨筆. 天界 1943, 23(268): 301-304

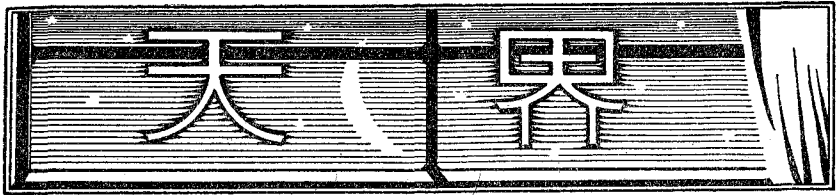
ISSUE DATE:

1943-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168674>

RIGHT:



第268號 (第 23 卷)

(昭和18年) 第 9 號

卷頭

隨筆

### “天文臺”といふ觀念、等々

Idea of an Observatory.

山 本 生 I. Y.

田上天文臺の落成式を舉げてから大略一ケ年となり、又、最初の天體觀測を行つてからは滿三年となる。この間に、各地から色々な人々が來觀された。自分は又、かうした來觀者の日々刻々の表情を見るのが、星を觀るのと同様に、楽しみのたねである。

來觀者の中には、“天文臺”といふものを、生來、一つも見たことが無い人もあつた。しかし、むしろ大多數の人々は、かつて花山を見たり、三鷹を見たり、又は書物や其他の出版物等によつて、諸外國の天文臺の寫眞などを見たりして、既に何等かの先入觀念を有つてゐる人々であるのは實に昭代の御蔭で、喜ばしいことでもあり、また、或る意味に於いては、御氣の毒なことでもある。

田上を觀に來る人々の心理は、その表情によつて、又その言葉によつて、又は後日の挨拶狀によつて、自分には良くわかる。

田上は、交通上、可なり不便な所である。と言つて、リクや、マクドナルドや、ヤーキースほど不便な所ではないのだけれど、汽車を棄てゝから6キロの田舎道を、川を渡り、山峽を越えて、尋ね々々たどり着くのは、今日の都會人には相當な苦勞であらう。自分の第6感に據れば、かうした田舎道の“まだあの山の奥です”と教へられて、途中から引き返す人々が全體の二三割はありさうである。しかしながら、これについては、今日の都會に住む天文ファンたちに再考三考して貰はねばならぬことが多い。いつも自分が言ふ通り、我が日本には天文臺が少な過ぎる。その少ない天文臺が、多くは大都會や中都會の近くに在るから、交通には比較的恵まれてゐる。しかし、天文臺が近代都市内外の交通に便利であるといふことは、主として氣象上から見て、天體の觀測研

究上の禍はひであり、只、かうした天文臺は、研究所ではなくて、世人の“見せもの”となり終る運命にあることを思はねばならぬ。かのキルソン山が其の一例である。それに反して、リクや、ロリエルは決して遊覽地とならない。田上は、今までの統計で見ると、(團體は別として)、來觀者は月々平均に約10人である。従つて、之れの應接は決して荷厄介ではなく、むしろ觀測者にとつては Recreation である。そして、都會地でないため、空は申しぶん無く、一年中、殆んど毎夜、對日照が見えてゐる。重ねて言ふが、天文觀察のため、近代都市は不適當地であり、田舎は理想境である。交通の不便は、どこ天文臺だつて豫想されなければならぬ。——と言ふと、田上はひどく不便な土地であるやうに思ひ過ぎる人があるかも知れないが、實は左様でもない。汽車の驛から僅か6キロで、路面は幅3米以上の坦々たる縣道である。自動車で(戰時は車の數が少いが)20分を費すに過ぎない。自分は、運動のため、この道を屢々自轉車で往還するが、行程は片道が25分乃至30分である。健脚者は1時間でのを突破する。この路にヘクタレルやうでは普通人とは言へない。

さて、次ぎに、田上への來觀者は、“天文臺”として、山顛に白亜の圓形ドームなどを豫想する人が多い。しかるに、實際、附近までたどり着いて、まづ眼に入るものは、(多少、高い形だけれど)、所謂文化住宅らしい一棟が、疎らな人家の間から見えるばかりである。(第一ドームは、構内に入らなければ、見えないから。)——なるほど、近代の天文臺は大低圓形のドームによつて象徵されてゐるのが普通である。しかしながら、元來、圓いドームは西洋建築の一種として發達した様式である。尙、あの圓形ドームの頂點には、尖柱が直立してゐてこそ、一種の美觀があるのだが、そんな飾りも何もない、只の圓球だけでは、決して美觀を呈するものではない。試みに、西洋の寺院や公會堂などの寫眞によつて其の美しさを見られよ。そして又、天文臺の無飾な圓蓋を見られよ……思ふに、昔時、中世紀の頃には、天文の諸機械などにも、非常に凝つた、美術的なものがあつたけれど、現代の望遠鏡その他の學術的な諸器械や、天文臺、研究所等の建築などは、實用といふ點のみを重要視してゐる程度であつて、設備や構へを美化するといふ餘裕は無い。普通の天文臺の圓形ドームなどを美と感ずるのは、一種の錯覺である。

自分は、田上の第二ドームを決して美的なものだと、誇る氣持ちは無い。しかし、前にも一度本誌に書いたことがある通り、最初この建築を設計する時から、附近の風景や、住宅の景觀と、ドームとの調和を破らないやうにするといふことを、多少は心懸けた。勿論、田上は我が國の一山村であつて、山容と樹林と、村落の一般民家、それに水や雲などの景は、全く“日本のもの”である。これ等と調和するためには、西洋式の殺風景な圓蓋でなしに、どこまでも

日本式の、せいぜい文化住宅の感じではなくてはならぬと考へた。むしろ、今一步進んで、“天文臺”などといふことを知らない。(或は豫期しない)來訪者には、それが只の普通の家屋以外の何ものでもないといふ感じを與へるやうなことを希望し、計畫した。だから、出來上つた今日、來觀者が外部から一見して

“天文臺などと言つたやうなものは、どこにも見當らないじやないか!”

と言ひさうな感じの建築になつて了つたのは、自分が期待した通りなのである。第二ドームの南側の張り出しを支へてゐる三本の柱にしても、それらが庭の植込みの中に立つてゐる關係上、削らないまゝの丸柱にしたのは、この意味である。しかしながら、かうした和風のドームが、自由に、軽く、廻轉し、長窓も目的通りに開閉して、觀測に少しも差し支へが無いやうに出來上つたといふ一事だけは、“日本建築のために”誇つても宜い新例を開いたものだと、自分は卒直に考へてゐる。

“天文臺”への來訪者の豫期を裏切る第三の點は、門をくぐつて、玄關から屋內に入つて、そこらを見まはしても、それでも尙全く“天文臺”の感じの無いことであらう。どこまでも其れは日本の一住宅である。疊の六疊や、八疊や、十疊の室ばかりで、床の間や、抵い窓や、違ひ棚や、椽側や、手水鉢や、松と楓と“つゝじ”等々の植え込み、古い石燈籠、點々とした跳び石など、玄關の次ぎの間には佛壇さへ見えてゐる。従つて、“研究室”、“書庫”、“工作室”、“暗室”、“地下室”、“準備室”、況んや“觀測室”と言つたたゞすまひは、わざわざ其れぞれの室内へ案内されるまでは、全く誰にも氣附かれないやうである。氣象觀測の諸器械も、それ等が全く“露場らしくない”露場にかくれてゐる。——去る五月頃に五六人の同伴者と共に來觀した某貴族は、小半時間ばかり、座敷に休憩して、暫く四方山の世間話などされた後、“もはや此れだけ”と思はれたものか? サツと立ち上つて歸らうとせられたことさへあつた。

各“室”を一通り案内された來觀者でさへ、“結局、これは、天文臺と言つても、要するに住宅の一附屬物に過ぎない”と感じられるかも知れない。いかにも其の通り、田上天文臺は山本家の一附屬物である。敷地の大部分が住宅本位に割り取られてある。それは二三百年來の設計に據る。そして、“天文臺”は僅かに數年來の計畫として、敷地の北西隅の空地に作られたのであるから。——しかしながら、ウンと根本的に考へて見て、抑も天文臺とは何であるか? 學者の住宅とは何であるか? と考へて見ると、天文臺も、住宅も、何れも人の經營する所であるが故に、働らき場も、休み場も、書齋も、研究室も、皆その一部一部として必要なのであつて、従つて、見る人、考へる人の立場々々によつて、天文臺を住宅の一部と考へるか、住宅を天文臺の一部と見るか、いろんな考へ方があるわけである。尙、世間には“天文臺”と言ひながら、それは只“觀

測室”のみを考への中に置いて、計算室も、暗室も、書庫も、その他の研究室や、陳列室も、皆天文臺に必須な一部ではないと考へてゐる人があるらしいが、それは學者生活の眞相を知らない人の短見であること、言ふまでもない。

ズツと以前に自分は書いたことがあると思ふが、學術研究といふものは、元來人間生活の“私的”な一部である。そして其れが本來の姿なのである。しかるに、我が國に於いては、(徳川時代の末期までは、その通りであつたのに、)明治の新時代が開けて以來、學校や官廳の組織が改まり、又、學術研究といふものが、最も鮮やかに、主として官公立の諸學校内に於いて行はれるやうになつたものだから、研究室などは皆“お役所”の形式を執つて、官廳化し、學者の生活も、亦、毎朝出勤、毎夕退廳と言つたやうな、オフィス勤めの勤め人(サラリド・マン)の如き性格を有つに至つた。そして、どこまでも自主的であるべき學者生活本來の姿が影を沒せんとしてゐるが、之れは誠に一種の變態である。遠い諸外國の例を古今に徴するまでもなく、我が國に於いても、幕末までの、最も自然な姿に於いて現はれてゐた學者の生活は、勤め人のそれではなくて、自主人のそれであつた。お隣りの支那にさへ、今日、尙、かうした民間の自主的な學者が學の主流をなして居り、大學や何々研究所に勤めてゐる人は第二流第三流人であるのを見る。

自分は、田上の生活をしてゐて、時々聯想をするのは、ハーヴード天文臺の構へである。尤も最近年はハーヴードも組織が大きくなつたから、以前よりも著しくオフィス式に感ぜられるやうになつたけれど、自分が滯留してゐた時代は(殊に、もつと以前の、ピケリング時代は)、臺長の住宅と研究觀測室とが、殆んど區切りの無い、一續きの家屋であつた。研究室へは始終臺長の子供たちが遊びに来てゐた。又、臺長も、何時となく、宅に居たり、研究室に居たりして、従つて、出勤時間とか、執務時間とか、退廳時間などと言ふものが、晝間も、夜間も、別に定まつてゐるわけではなかつた。従つて、臺長は住宅内に書齋などといふものを有つてゐなかつた。それは必要がなかつたのである。板戸一つ開けば、隣室は即ち天文臺であり、研究室であり、又は觀測室であつたのだから。——かうした構へのものは、歐洲に殊に多い。我が日本に於いても、學者が“勤め人”の生活や、その魂性を脱し、自主人として勇往邁進せんことを望むものである。

尙、世間一般の人々も、學者の生活といふものを、囚はれた眼から放たれて、その最も本格的な姿に於いて、認識し直さんことを望むものである。

(1943-8-30)